

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12478

研究課題名（和文）韓国における周辺部女性労働運動と労働市場に関する研究：1980～90年代を中心に

研究課題名（英文）A Study on the Marginal Female Labor Movement and the Labor Market in Korea: Focusing on the 1980s and 1990s

研究代表者

横田 伸子（Yokota, Nobuko）

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：60274148

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は次の3点である。1980～90年代の韓国の周辺部女性労働者の「声なき声」を擲り上げる有効な方法として、従来の階級分析とは異なる、女性工場労働者が自ら執筆した小説、手記などを分析する「女工文学」という新たな視座を見出した。韓国・日本との比較の観点から、オーストラリアの労働運動の事例分析を行い、非正規労働者と正規労働者の連帯の形成と両者の同一労働組合への組織化について考察した。2000年以降、ケアワーカーや家事労働者などを中心に急速に増大している韓国の「超短時間労働者」の特徴と歴史的意味をジェンダーの視点から明らかにし、「協同組合」という新たな組織化の方法を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まず、「女工文学」という新しい視座の発見によって、歴史の中でほとんど顧みられることのなかった韓国の女性工場労働者の声なき声を擲り上げ、彼女たちの主体的な生きざまをとらえ直す新たな分析方法を提供できた。次に、「同一産業同一労働組合」を体現するオーストラリアの労働運動との比較分析を通して、韓国と日本では困難な、非正規労働者と正規労働者の連帯を形成し、両者を同一の組合に組織する戦略を構築する重要な示唆を得た。第三に、韓国だけでなく、世界的に急速に増大している「超短時間労働者」の実態を歴史的に明らかにし、もっともインフォーマルでプレカリアスな雇用である、これらの労働者の問題解決の糸口を導き出した。

研究成果の概要（英文）：The achievements of this research are threefold. First, it discovered an innovative perspective called 'factory girl literature', which analyzes novels and memoirs written by female factory workers themselves, as an effective method to capture the 'voiceless voices' of peripheral female workers in South Korea during the 1980s and 1990s, differing from traditional class analysis. Second, it analyzed a case study of the Australian labor movement from the perspective of comparison with Korea and Japan, and examined the formation of solidarity between irregular and regular workers and the organizing of them both into the same labor union. Third, it clarified the characteristics and historical significance of the "ultra-short-time workers" who have been rapidly increasing in Korea since 2000, especially care workers and domestic workers, from a gender perspective, and found a new way to organize them as "co-operatives".

研究分野：ジェンダー

キーワード：女工文学 周辺部女性労働者 非正規労働者と正規労働者の連帯と組織化 同一産業同一労働組合 超短時間労働者 インフォーマルでプレカリアスな雇用

## 1. 研究開始当初の背景

韓国の労働研究において、長きにわたり労働運動や労働市場の中心は男性正規労働者によるもので、女性労働者は「周辺部」労働者と捉えられてきた。しかしながら、「周辺部」に位置づけられて来た女性労働者は、実際には韓国の経済発展において重要な役割を果たし、女性労働運動は、韓国の民主的労働運動を牽引してきたのである。それにもかかわらず、その実態や意味の解明は等閑に伏されてきた。とくに、1980～90年代に韓国の重化学工業化を主導したのは財閥企業を始めとする大企業であったため、労働研究も大企業の男性正社員の労働市場や労使関係、労働組合運動に集中し、女性労働者に関する研究はわずかでは空白となっている。これでは、韓国の労働運動やその基盤となる労働市場構造の全体像を立体的に把握するのは困難である。そこで、本研究は、1970～90年代の「開発年代」に経済発展を牽引したリーディングセクターでもあり、女性若年労働者が集中して就業していた繊維産業と、伝統的に女性労働者の典型的な職業であった家事労働に絞って調査研究を行おうとした。具体的には、1980～90年代のそれぞれの部門の女性労働者の組織化の特徴、労働市場の構造、労働や生活の実態を解明しようとするものである。

さらに、この時代の「周辺部」女性労働者の存在が、韓国の労働社会の転換点となった1998年の経済危機以降の労働運動や労働市場構造とどのような歴史的な連続性及び断絶性を持ったのかについてもこれまでほとんど議論されてこなかった。1980～90年代の「周辺部」女性労働者をテーマとする本研究は、こうして韓国労働社会の研究上の大きな空白を埋めるべく着手されたのである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、従来の韓国の労働研究において空白となっていた、1980～90年代の「周辺部」女性労働者の組織化と労働運動、労使関係の特徴及び、それを規定した労働市場構造、彼女たちの労働や生活の実態を解明することである。1980～90年代の韓国の労働運動や労働市場構造を考察する際、これまでの研究は、財閥企業を始めとする大企業の男性正規労働者に焦点を当てた企業別労働組合運動と労働市場構造の分析に偏重していた。しかしながら、本研究によって、そのような一面的なアプローチを超え、より立体的かつ全体的な視点でこの時代の韓国の労働研究を再構成することを目的としている。さらに、1980～90年代の女性労働運動と、1998年以降の新しい女性労働運動の関係性、すなわち両者の連続性と断絶性を明らかにすることで、韓国労働運動史の中で、後者を新たに歴史的に意味づけ、位置づけたりすることも本研究のもう一つの目的である。

とくに、本研究の独自の視点と目的は、労働運動や労使関係、労働市場に関するマクロ統計の分析だけにとどまらないことである。当時の女性労働者が執筆した小説や手記、ルポルタージュ、あるいは彼女たちへのインタビューを通して、彼女たちの生活や労働の実態を明らかにしようとする。それは、いわば労働社会の周辺部に置かれた彼女たちの「声なき声」を掬い上げ、彼女たちの「生きざま」を生き生きと浮き彫りにする試みでもある。こうして初めて、韓国の「周辺部」女性労働者の労働社会の特性が浮かび上がるのである。

また、韓国の女性労働者や女性労働運動は「周辺部」に位置しており、彼女たちの多くは孤立、分散して存在しているがゆえに、その組織化のされ方は、男性正規労働者とは異なり企業をベースには行われない。代わりに、地域コミュニティに根差したコミュニティユニオンによって支えられていたり、女性の貧困問題の解決と自立を促す社会運動とも密接に連携して展開されてきた。したがって、本研究のもう一つの目的は、地域コミュニティを基盤にしたコミュニティユニオンや社会運動ユニオンと、女性労働運動の関係性を明らかにすることである。これは、韓国と日本ではなぜ、女性非正規労働者と男性が主体となる正規労働者の運動の連帯が困難なのかという問いに答えることでもある。

## 3. 研究の方法

本研究では、韓国における1980年代から90年代の「周辺部」女性労働者の労働運動と労働市場構造の分析を行う際、次の二つの部門を研究対象にしようとした。開発年代における経済発展のリーディングセクターであり、女性労働者が集中して就業していた繊維産業と、伝統的に「周辺部」女性労働者の典型的な職業であった家事労働である。具体的には、それぞれの部門の労働者の組織化、労働運動の特徴、労働市場の構造、彼女たちの生活や労働の実態について調査研究を行おうとした。加えて、韓国の労働社会の転換点となった1998年以降の「周辺部」女性労働者と、1980～90年代の連続性、断絶性についても見てみようとした。

このように、本研究では韓国における現地調査が必須である。しかしながら、2020年から始

まった新型コロナウイルス感染症のパンデミックが3年以上も世界中で猛威を振るい、国際的な移動に大きな制限が加えられたことによって、2020年から2022年にかけて計画されていた韓国での現地調査を実施することができなかった。2023年になってようやく、予定されていた調査の一部を実行に移すことができたのである。

したがって本研究は、こうした調査研究上の厳しい制約を受けながらも、明らかにすべき調査項目を以下のように抽出し設定した。つまり、研究対象である「周辺部」女性労働者の、生活実態、労働過程、雇用・労働条件、言い換えればプレカリアス (precarious) な不安定雇用や劣悪な労働条件、法・制度、労働組合の保護からの排除というインフォーマル (informal) な就業の性格、組織化の方法、労働組合と労働運動の特徴についてである。とくに、とによって、非正規労働者と正規労働者の連帯と団結の形成や、統一的な同一労働組合への組織化の可能性について探求しようとした。

これらの調査項目について、それぞれ以下の3つの方法によって調査研究を行い、その結果を分析しようとした。(1).統計資料の原資料 (raw data) の収集と分析、(2).文献資料の収集と分析、(3).1980年代から現在まで「周辺部」女性労働者の労働運動に参加した活動家や労働者へのインタビュー調査及び設問調査である。新型コロナウイルス感染症の世界的流行による海外渡航制限のためアプローチが難しい場合には、その都度何らかの迂回的方法を試みることにした。

(1)の統計資料の原資料の収集と分析については、精度の点で問題の多かった1980年代の韓国の政府統計が整備され、格段に精度が高まったことに加え、外部への公開が進み、誰でも正確な政府統計資料の入手が可能になった。また、韓国政府のシンクタンクである韓国労働研究院が行った標本調査結果やその原資料も外部に公開されている。しかし、労働研究院の計量分析を専門とする研究者から直接助言を得ながらこれらの原資料を扱う必要があったため、厳しい渡航制限の中、原資料の入手はあきらめざるを得なかった。その代わりに、韓国労働社会研究所及び韓国非正規労働センターが「経済統計活動調査」及び「経済活動付加調査」の原資料を独自に分析し発表した統計資料を送ってもらい、分析した。ただしこれらは、1990年代後半以降の統計資料がほとんどで、それ以前のデータを手に入れることは困難であった。

(2)の文献資料の収集と分析については、1980~90年代の女性労働に関する研究が圧倒的に少ないため、学術文献以外の文献資料を中心に探さなければならない。つまり、1980~90年代の民主化運動の中で数多く出版された労働現場や労働問題に関するルポルタージュや労働者の手記、労働組合の事業報告、労働現場に入って労働者の組織化に尽したキリスト教団体の出版物、労働新聞などである。これらを、国会図書館、国立図書館、韓国労働研究院、大学図書館、韓国民主化運動資料センター、韓国女性労働者会、全国女性労働組合などで資料収集を行う予定であった。さらに、1980~90年代には、多くの大学や地方自治体によって都市貧困層や都市スラムに関する実態調査が多く行われた。これらの文献資料を収集し分析することを通して、統計資料では得られない、現場感覚のある労働者の生活や労働の実態を浮き彫りにすることを狙った。しかし、これらの文献調査もまた厳しい渡航制限のある中、2022年までは着手できず、2023年調査で一部だけ実施できた。

(3)のインタビュー調査及び設問調査は、韓国女性労働者会や全国女性労組のOGや現職の活動家に対して行う予定であったが、これも韓国に渡航できなかったため、2023年の調査まで待たなければならなかった。

#### (4) オーストラリアの労働運動・労使関係との比較

(1)~(3)に加えて、研究代表者は、2023年度にオーストラリアの Australian National University (ANU) の Korea Institute で1年間の在外研究を行った。その一環として、韓国・日本とオーストラリアの労働運動・労使関係の比較研究をした。というのは、韓国の「周辺部」女性労働者の組織化を考察する際、コミュニティユニオンや社会運動ユニオンズムの役割は重要であり、オーストラリアでは、それらが労働運動の中核をなし、強力だからである。さらに、韓国・日本では正規労働者が中心となる企業別労働組合が労働運動の主力であり、非正規労働者が労働組合から排除される場合が多い。これに対して、オーストラリアの労働運動は、「一産業一労働組合」という原則のもと、非正規労働者と正規労働者を統一的労働組合に組織する動きが盛んに展開している。これは、韓国・日本の労働運動や労使関係の対極にある。そこで、研究代表者は、地域社会とも緊密な関係にあり、「一産業一労働組合」を運動の中でもっとも体現している ANU 教職員組合の事例を中心に調査研究を進めた。その内容は、文献調査、インタビュー調査に加え、同労働組合によるストライキの決議から、実施、そしてその後に至るまでの参与観察である。

## 4. 研究成果

## (1). 韓国での現地調査

新型コロナウイルス感染症の全世界的な拡大による海外渡航制限などのため、2020～22年までは当初、韓国で予定されていた現地調査は全くできなかつた。そこで、2022年度中に使用する予定だった助成金を23年度に繰り越し、ようやく2023年7月に韓国でのフィールド調査を実施することができた。

2023年7月に韓国女性労働者会代表ペジンギョン氏、全国女性労働組合委員長チェスンニム氏、九老生活自活センター院長ユンヘヨン氏に対してインタビューをすることができた。

ペジンギョン氏、チェスンニム氏からは、2000年代以降、女性を中心に急速に増大している「超短時間労働者」の実態と組織化現況について話を聞くことができ、それは、プレカリアスな細切れ労働による「過少労働」の全世界的拡がり軌を一にするものであることが確認できた。同時に、こうした働き方は、1980年代から家事労働者を中心に韓国では「周辺部」女性労働者の間では広く一般的に行われていたものであることを確認した。これらのインタビューと韓国女性労働者会付設の家庭管理士協会の資料、韓国統計庁「経済活動人口調査」及び「経済活動人口付加調査」の原資料に基づいて、韓国の「超短時間労働者」について、ANUのKorea Instituteで、2024年2月7日に研究報告を行った。タイトルは、“The Increase of *Ultra-Short-Time Workers* and the Spread of ‘Fragmented Work’ in Korea - A Gender Analysis of Changes in Labor Policy and the Structure of Irregular Employment from the ‘Asian Financial Crisis of 1998’ to 2022 - ”である。さらに、これを発展させて、日本社会政策学会第148回大会(2024年5月18日於：慶應義塾大学)で、「1998年『IMF経済危機』から2022年までの韓国の労働政策と非正規雇用構造のジェンダー分析：超短時間労働者の増大に焦点を当てて」というタイトルで研究報告を行った。

ユンヘヨン氏は、1998年に設立された貧困女性の自立支援NPO機関九老生活自活センターの院長であり、80年代に繊維産業の工場労働者として九老工団で就業し、85年に女性工場労働者が起こした九老同盟ストライキのリーダーという経歴の持ち主である。ユンヘヨン氏からは、1985年の九老同盟ストライキを主導した九老工団の女性労働者の実態及びストライキに至るまでの経緯について詳しく伺うことができた。このインタビューから得られた知見は、後述する女性工場労働者出身の小説家チャンナムス氏に対するインタビューとともに整理・分析し、近日中に学術論文としてまとめた。

## (2). 新しい方法論-「女工文学」-の発見

前述したように、研究代表者は2023年4月から1年間オーストラリア国立大学(ANU)の韓国学研究所(Korea Institute)で在外研究を行い、オーストラリアの地域コミュニティ運動や社会運動ユニオニズムとの比較の視点から、韓国の「周辺部」女性労働運動について考察した。とくに、ANUの受け入れ教授であり、1920～90年代の韓国の女性工場労働者に関する文学・歴史研究の第一人者であるルース・バラクロウ(Ruth Barraclough)教授との研究交流を通じて、女性工場労働者(女工)が描いた文学世界から彼女達の情念、生活、文化を歴史的に浮かび上がらせる方法を獲得した。

彼女の著作 *Factory Girl Literature: Sexuality, Violence and Representation in Industrializing Korea*(2012, California University Press)は、1920年代から90年代までの韓国の女性工場労働者によって書かれた小説を丹念に分析し、それまでほとんど顧みられることのなかった女性工場労働者の「声なき声」を掬い上げ、彼女たちの主体的な生きざまをとらえ直す新しい視座を提供している。この研究方法は、不足する文献資料の収集と分析を補って余りあるものであった。バラクロウ教授が、「女工文学」という新しいジャンルを創造し確立したことで、韓国以外の東アジアの女性工場労働者の実態を彼女たちの主体的な視点から考察できるようになった功績は大きい。研究代表者は、他の韓国学研究者とともにこの著書の日本語翻訳プロジェクトを立ち上げ、近日中に出版予定である。

加えて、ANUのKorea Instituteは、韓国を代表する女性工場労働者出身の小説家チャンナムス氏を2024年1月～3月に客員研究員として招聘した。チャンナムス氏もまた、1980～90年代を通じて女性工場労働者として就業し、後にその時の経験を小説『盗まれた仕事(빼앗긴 일터)』に描いた。これは、1980～90年代の女性工場労働者の実態を知る数少ない貴重な作品となっている。研究代表者は、「女工文学」の分析視点も援用しながら、彼女に対して数度にわたるインタビューを行った。

## (3). オーストラリアにおける非正規労働者と正規労働者の連帯の形成と統一的労働組合への組織化に対する研究

研究代表者は、1年間にわたるANUにおける在外研究期間、韓国・日本との比較の視点から、オーストラリアの地域コミュニティと社会運動ユニオニズムの展開及び、非正規労働者と正規

労働者の連帯の形成と統一的労働組合への組織化について研究を行った。その研究対象として、非正規労働者と正規労働者の連帯と団結を組合結成の理念に掲げる全国高等教育組合(NTEU)に主導された大学同盟ストライキの分析を選んだ。また、NTEUの中でももっとも大きな成果を上げたのがANU支部のストライキである。そこで、ANU教職員組合によって緻密に作成された団体交渉報告書と、大学と締結された労働協約の分析、教職員組合の執行部メンバーに対するインタビュー、そして、その労働運動の参与観察を通じて、ANUのストライキの意味と成果を探った。その結果、ANU教職員組合の地域コミュニティや学生組織との緊密な関係、社会的課題解決に向けた学生や市民との連携、「一産業一労働組合」の原則に基づいた非正規・正規労働者の統一労働組合組織など、韓国・日本の労働運動とは対照的な特徴が明らかになった。これは、韓国・日本における労働運動の組織化と発展、なかでも非正規労働者と正規労働者の連帯と団結の形成に重要な示唆を与えるものであった。研究代表者は、この研究結果を、「オーストラリアにおける非正規労働者と正規労働者の分断を超えた連帯と労働運動 - オーストラリア国立大学教職員組合のストライキの事例から」(『労働調査』2024年1月)というタイトルで論文として発表した。そして、これをさらに発展させて、同上の日本社会政策学会第148回大会で、「オーストラリアにおける全国高等教育組合(NTEU)による非常勤教職員(casual worker)と正規職教職員の連帯と労働運動 - オーストラリア国立大学教職員組合のストライキの事例から - 」というタイトルで学会報告を行った。

#### (4). その他

本科学研究費助成金を用いて、2021年9月12日に日韓国際シンポジウム「ジェンダー視点で考える日韓の働き方改革とコロナ禍」を女性労働問題研究会と共同開催した。このシンポジウムはまさに、日韓の「周辺部」女性労働者がコロナ禍において、どのように労働運動を組織し、自らの労働権と生存権を守るのかについて、日韓の研究者及び労働者、活動家が一堂に会して議論したものである。研究代表者は、それにさきがけて2021年7月31日にオンラインで開催された女性労働問題研究会セミナーにおいて、「韓国における女性非正規労働者の組織化:最近の韓国の運動から何を学ぶか」というタイトルで、韓国の家事労働者の組織化について報告した。ここでは、「協同組合」による、家事労働者などの「周辺部」女性労働者の新しい組織化の方法について詳細に論じている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 横田伸子	4. 巻 636
2. 論文標題 オーストラリアにおける非正規労働者と正規労働者の分断を超えた連帯と労働運動ーオーストラリア国立 大学教職員組合のストライキの事例から -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 労働調査	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横田伸子	4. 巻 66
2. 論文標題 ジェンダーの視点から見た韓国における非正規雇用構造の変化 超短時間パートの増大と「細切れ労働」 という働き方の拡散を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 女性労働研究	6. 最初と最後の頁 7-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横田伸子	4. 巻 749
2. 論文標題 【特集】韓国における労働改革とジェンダー 特集にあたって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大原社会問題研究所雑誌	6. 最初と最後の頁 1 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横田伸子
2. 発表標題 1998年「IMF経済危機」から2022年までの韓国の労働政策と非正規雇用構造のジェンダー分析：超短時間労働者の増大に焦点を当てて
3. 学会等名 日本社会政策学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Nobuko Yokota
2. 発表標題 The Increase of Ultra-Short-Time Workers and the Spread of “Fragmented Work” in Korea - A Gender Analysis of Changes in Labor Policy and the Structure of Irregular Employment from the “Asian Financial Crisis of 1998” to 2022 -
3. 学会等名 Korea Institute, Australian National University (招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 横田伸子
2. 発表標題 オーストラリアにおける全国高等教育組合（NTEU）による非常勤教職員（casual worker）と正規職教職員の連帯と労働運動 - オーストラリア国立大学教職員組合のストライキの事例から -
3. 学会等名 日本社会政策学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 横田伸子
2. 発表標題 ジェンダーの視点から見た韓国の労働改革ー超短時間パートの増大と「細切れ労働」という働き方の増大を中心にー
3. 学会等名 日韓文化交流基金 JENESYS2022日韓次世代会議（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横田伸子
2. 発表標題 韓国における女性非正規労働者の組織化:最近の韓国の運動から何を学ぶか
3. 学会等名 女性労働問題研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横田伸子
2. 発表標題 ジェンダーの視点から見た韓国における非正規雇用構造の変化：超短時間パートの増大と「細切れ労働」という働き方の拡散
3. 学会等名 福祉国家構想研究会 雇用・労働部会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 日韓女性 働き方改革 シンポジウム ジェンダーの視点で考える日韓の<働き方改革>と コロナ禍	開催年 2021年～2021年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------